

## 内外交差点

# 私たち女性はもっと タクシーの世界で活躍できる

大久保 恵美氏 (兵夕協副会長) 第1/12回

今回から、月に1回、12回にわたり「女性乗務員」や「女性とタクシー」をテーマに連載することになりました。約1年間、よろしくお願ひいたします。

私はさる3月8日の全タク連理事会で、現在、業界が外国人の在留資格の1つである「特定技能1号」に、バス・トラック業界も含めた「自動車運送業」として、受け入れ分野になることに反対しました。その際に私が主張したのが、「私が海外に旅行に行った時に必ず現地のガイドに女性は夜間、一人でタクシーに乗らないように注意される」ということです。「乗るなら、ホテルのロータリーに止まっている車両にするように」と。つまり、外国人が「自分の国のタクシーは危険である」というのです。一方、日本ではどうでしょう？いつでも、どこでも安心して目的地に、何のトラブルに巻き込まれることもなく送ってもらえる。夜中にタクシーを見つけたら、安心さえも覚える——と。

まずは、「外国のタクシー」と「日本のタクシー」は何が違うのかをよく考えて欲しいのです。そして日本のタクシーがいかに安全・安心な乗り物かを私たちは、もっと自覚すべきだと思うのです。その安全は何によって、担保されているのか。もちろん、皆様による厳しい運行管理や行政の監査もそこにはありますが、やはり、乗務員一人ひとりのモ



\*コンパートメント方式の海外のタクシー。大久保氏は、国内既存の防護板について、「まだ乗客が手を挿し込む余地があり、(男女とも)万が一があり得る」と指摘している。

ラルの高さがあります。もちろん、必ずしも外国人が危険であるというつもりは毛頭ありませんが、日本で生まれ育って、日本の免許証を持って、その



人が2種免許を取得して乗務員になるというのが、今の制度。これが、夜中に女性が一人で乗っても、子どもを一人で預けても安心できる、「安心な乗り物」を担保しているのだと思います。今、人手不足で苦しいからといって、例えば2種免許を無くしたり、特定技能1号の受け入れ業種としてしまったら、「夜中に一人で乗れないタクシー」と何ら変わらないものとなってはしまわないかと心配しています。外国の方の言うようなタクシーになってしまっは、それこそ、日本のタクシーの安全性が地に墮ちる。「タクシーでなくても良いのではないかと」なってしまうのではないかと。そうなってしまうのは、タクシーとライドシェアとの間の違いがなくなってしまうのではないのでしょうか？

そうならないため、日本人の若年層や女性の登用が望ましいのです。特に産業特性的に労働時間の調整がしやすいため、女性の採用が最適解であると考えるところです。私自身も女性乗務員として業界に入りましたが、その際の経験として、助手席に男性、後部座席に複数人の男性の乗車があるとやはり、怖いものでした。密室で多数の男性に囲まれていたというのは、結果として何もありませんでしたが、心理的に相当に圧迫されましたし、万が一何かあってからでは遅いのです。一般的にはどうしても身体の大きさからしても男性に女性はいけません。現状で考えれば、メリットに比較して女性とそのリスクある仕事を選ぶ動機が少ないのです。

そこで提案ですが、パーテーションで前席と後席を完全に区切ってしま。隣には人を乗せない。各所で防護板を探したのですが、女性が安心できる防護板かと言えば、そうでも無いと思います。例えばニューヨークやロンドンのタクシーは、コンパートメントで完全に隔離されているものもあります。助手席に乗せないことで乗車拒否にならない等のルールを見直すことで、乗務員の安全を守る仕組みをルール、システム面で確立できれば、私たち女性がタクシーの世界でもっと活躍できると思うのです。